

Title	農村問題と其の對策(中)
Author(s)	河田, 嗣郎
Citation	經濟論叢 (1923), 17(2): 237-260
Issue Date	1923-08-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/128055">http://dx.doi.org/10.14989/128055</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷七十第

行發日一月八年二十正大

## 論叢

武士成立の經濟的要素 . . . . . 文學博士 三浦 周行  
 綜合奢侈稅の批評 . . . . . 法學博士 神戶 正雄  
 獨立海運業者の排他的手段 . . . . . 法學士 小島昌太郎  
 文化的認識と歴史的認識 . . . . . 法學士 恒 藤 恭

## 時論

地租委讓と收入の缺陷 . . . . . 法學博士 小川 郷太郎  
 農村問題と其對策 . . . . . 法學博士 河田 嗣郎

## 說苑

壹岐國に於ける地割制度 . . . . . 農學士 奥 田 彥  
 歴史派經濟學發達の徑路 . . . . . 法學士 山口 正太郎

## 雜錄

氏族制度雜考 . . . . . 法學士 本庄榮治郎  
 報酬遞減法則の適用範圍 . . . . . 法學士 山口 正太郎  
 照應計算の一方方法 . . . . . 經濟學士 蛭川 虎三

## 農村問題と其の對策（中）

河 田 嗣 郎

### 六 農業全般の運命

農村問題には農業々務の内部に於ける諸多の問題の含まれたると同時に、農業といふ業務が全體として之に遭遇して居る問題の存すること、前に之を述べた通りである。そして之を農村問題としての重要から謂へば、何れがより多く重大だとも斷定し難く、その内容に於ては両者は互に關聯せるもので、相集まつて現時の農業と農村とを破壊し終らすんば止まざらんとするの勢がある。

仍て少しく農業々務全體としての現時の問題に就いて見るに、それは農業といふ産業が、現時の所謂資本主義經濟又は營利主義經濟に合致し難き性質を有し、よく之と合致せる商工業と相並むでは、到底十分なる競争を爲すことが出来ないで、漸次立遅れを喰ひ、時勢の進むと共に農業疲弊の狀勢の著明となるを避け難きより生ずる問題之である。即ち現時の農業は、商工業との比較に於て漸次不振の狀況に陷るは勿論のこと、農業それ自身の有する運命に於ても、動もすれば

漸次退歩し、昔時の狀況に比して痿痺不振に陥るをも避け難き有様に在り、爲めに農業といふ産業系統の全體に涉る問題として、如何にして其の不振の狀況を救ひ、之をして能く立行くを得せしむるのみならず、時勢に順應して發展を遂げ得せしむべきかてふことが、重大問題たらざるを得なくなつた。現今頻りに唱道せらるゝ農村振興といふことも、實は農業振興を以て其の意義の大部分を爲す次第である。

現時の營利本位なる資本主義經濟の下に於て、何故農業が業務として立行き難きかといふことを、それ自體に就いて詳論する段になると、一面には資本主義經濟の本質を明かにすると同時に、他面には農業經濟の本質を究めて、その然る所以を評論せなければならぬから、茲に之を試むる餘地はないが、要するに農業が本來必要本位の經濟であつて營利本位のものたらず、其の生産は技術上の理由と經營上の理由とからして兎角十分に機械力を利用し其他全幅に資本の力を用ゐて之を行ひ難く、天然に依頼する所と勞動に待つ所とが今も昔に變らず依然として多大なることは、資本主義經濟の下に於ける農業不振の本源たらざるを得ない。とかく農業は現時に至るも自給經濟的の性質を失はず、又多く手工的の生産たる本性を有し、其事特に我國に於て著明で、然かも之を革めて現代的のものと爲し、主として資本に依頼して生産を行ひ、市場に對する營利企業として遺憾なき發展を期せしめんことは、技術上と經濟上との理由よりして、所詮容易の業にあら

ず、全然生産物と生産組織との變革されざる限り、殆んど不可能に近きものすらある。その殆んど不可能に近きものあるが爲めに、農業は現時に至るも尙ほ依然として殆んど多く機械と名けらるゝものを使用せないで、貧弱極れる道具を使用して小規模なる手工的生産を續くるか、たとへ機械を用ゐてもよく十分に企業としての營利上の目的を達し得ないで、漸次業務としての不振の運命を辿り行く外なき境遇に在る。(拙著農業經濟學參照)

斯く農業が十分に機械の力を用ゐ得ず、従つて分業の利得を收め難く、又多く大規模經營に依る利便に浴し得ないで、生産上甚だ不利なる狀況に在るに加へて、農民なる者が又田舎に住ふ人たるが爲めに、市場を中心として行はれる産業として農業を十分に企業化するに適せず、都會を市場としその市場に對して農産物の供給販賣を爲すを以て目的とし、其の供給販賣上に於て十分なる商的才能を發揮して、農業々務上に於ける企業利得の多大なる謀を立て、以て能く農業の隆盛繁榮を將來し得るに足るだけの企業家的素質を具有せざることは、實に現今農業々務の不振を來せる他の大理由を爲すものたらざるを得ない。農業も亦現時の一般經濟の下に於て企業として行はれるものたるからには、之が經營の任に當る者は企業家としての才能を具備せなければならぬ。然るに田舎に住ふ農民に、どうして都市の商工業者の多き企業的才能を期待し得られやう。農民といへば純朴なるを以て特長とし、都會人の機略に長けたると比較して、著しき相違あるを

常とする。その農民が企業家として都會の商人と立交り遺憾なく商的機能を發揮し、よく農業を企業として盛り立て行くことは、所詮望み難き所とせなければならぬ。(同上)

果して右の如く農業が、一面には生産上の理由から營利企業として十分發展するに適せざる所あるに加へて、他面には又之を行ふ農民に企業家としての資格の具備し難きものありとせば、現時の營利企業制たる資本主義經濟の下に於て、とかく不振の狀況を呈し、動もすれば萎靡疲弊に陥らんとすること、洵に故ありとせなければならぬ。然かもその事情は、之を農業に取つて見れば、實に由々敷大事たるは勿論のこと、國家社會の上から見ても、捨て置き難き大事實たらざるを得ない。茲に於てか彼の農村振興といふが如き時務上の波紋は廻き起る次第であつて、重大なる經濟問題と社會問題とが、這向に發生せざるを得ざるは、言を俟たざる所なりとする。

その重大問題としては、國民食糧問題の如きも考へられるし、又農村荒廢といふ事實が、一國の社會構成上政治的に經濟的に有する諸多の問題も考へられる。農業衰微より來る國民食糧問題は、英國に於て痛感せられつゝあり、我國の如きに在つては、今の所まだ唯だ將來の問題として考へられるに過ぎぬが、併し將來の問題として之を想像すれば、其の意義の痛切なること、實に世界無比たるべきものがある。けれども私は今茲には之に就いて詳論して居る暇は持たぬ。たゞ其の重大切痛なるべきことだけを道ふに止めて置く。又農村荒廢に依つて一國經濟の被るべき影

響、更には農村住民の大多數に依つて維持せられたる政治的勢力の亡滅に依て生すべき一國政治上の重力の偏依、更には又さなきだに重大問題たらんとする中等階級問題が、農民の衰微に依て促進せらるべき事情、尙ほ又農民の衰亡に依て生ず國民氣風の變化、其他此種の多くの事情に就いて致へて見るならば、農業の疲弊と農村の荒廢との甚しきに至るに連れて生じ來るべき諸問題の、如何に重大切實のものたるべきかは、洵に想像に餘ある所たらざるを得ない。

## 七 農民運動

現時の時勢の下に於て、農業疲弊の運命は不可避免的な傾向だとすれば、農民たるものは、今後には實に坐して衰亡を待つべきか、それとも起つて自ら救ふ運動を起すべきか、二者其一を選ばねばならぬ境遇に在る。併しその選擇は謂ふ迄もなく後者でなくてはならぬが、たゞ其の救済の途を講ずるに就いては、色々のことの考慮せらるべきものがある。

元來農業が現今業務として立行き難きは、現時の經濟一般と農業とが、甘く一致適合せないからのことなのだから、農業を救はん爲めには、一方農業それ自身の狀態を改革することの必要があると同時に、他方には又現時の經濟一般を多少ともに革めて、其の組織に於ても、其の運営の目的及び方法に於ても、太いなる改革を行ふ必要がある。そして其の經濟一般の改革は、必竟する

に現時の餘り極端なる營利主義を打破し、利得よりも必要を重んずる傾向を造り成すことに向つて行はねばならぬ。即ち現時の極端なる營利本位の經濟を革めて、必要本位の經濟を建立するに在る。經濟一般が必要本位に趣けば、元來必要本位的の産業たる農業は、茲に自らに能く存立し得べき地盤を見出し得ることとなる。此の事業が最も困難なる大事業たるは申す迄もないが、ともかく其の能く遂行さるゝに依てのみ、農業は終局的の意味に於て救済され得るものとする。然らざる限り、詳言すれば現時の營利本位なる資本主義經濟の存續する限り、農業は終によく本當に救済さるゝ見込はない。けれども此の經濟一般の改革といふことは、特に農業問題として之を論議すべき筋合のものではなく、之は一般的改造の問題だから、茲にはたゞ農業救済の爲めにも其の必要避くべからざることだけを、明かにするに止めて置く。

ともかく農民が起つて自ら救はん爲めには、農民運動を起すの必要なこと、之を經濟一般の改造の目的の爲から考ふるも、又之を農業を自體の狀態の改良の爲めから考ふるも、當今の時勢の下に於ては、實に避くべからざる所たるは、吳々も注意さるべきことに屬する。由來農民は餘りに消極的で、たゞ與へられる運命を甘受するを以て能事とした。之は農業といふ業務が天然に依頼し、たゞ天の與ふる所を受けて満足する外、餘り多く人爲の施すべきものなき性質のものたることより自らに養ひ成されたる農民の性情であらう。けれども農民は何時までも斯くてあるべ



きではない。大自然に對しては、たゞ智識の之を許すだけのことしか施すべき所もないが、經濟關係の如き社會關係に至つては、元之れ人と人との關係たるに外ならないから、之に對しては農民も亦少しく積極的に働きかけて、其の關係一般をして、農業々務に都合よきものたらしむるに努むる必要がある。少くとも農業も餘り繼子扱されぬだけのことは、農民自ら求めて社會に要請する所がなくてはならぬ。自ら其の要請を爲さざる限り、今日の如き時勢の下に於ては、誰も力になつて呉れるものはなく、他力宗は到底社會的救助の道でないから、坐して衰亡するを希はざる限り、自ら起つて救済の道を開拓する外はない。

此の意味に於ては國家とても多く頼むに足りぬ。從來農民は餘りに國家に頼より過ぎて居た。今も尙ほ國家に依頼し過ぎる嫌があるが、之に頼よつて國家は果してよく農業救済の安全なる道を造り與へて呉れるか。農業繁榮の前途が果して約束されるか。その救済も約束も十分に行はれ得ない爲めに、現今農業は四苦八苦の難境に陥つて居るわけではないか。果して然らば、國家にばかりすがつて居ることは、決して唯一有效の農村振興策でもなければ、農業救済の道筋でもない。どうしても其所に農民自助の運動がなくてはならぬ。

尤も從來とても此の自助運動の全然行はれなかつたわけではないが、それは大抵産業組合運動の如き、業務組織に關するものであつた。そして此種の運動の必要缺くべからざることは、言を

俟たざる所で、そのよく十分に發展し十分に成功せんことは、農業の將來を建成せん爲めには、最も根本的に重要な所とせなければならぬ。併し運動は之れだけを以て満足すべきではない、更に大いに諸多の方面に涉つて行はれる必要あるを知らなければならぬ。殊に社會的意義に富める諸運動の行はれる必要切實なるを知らなければならぬ。

## 八 米價維持策

然らば其の運動はといふに、それは固より色々の方面に涉つて行はれ得べきだが、差當つての必要としては、農産物特に米穀の價格維持運動が考へられる。昔時のやうに農家の自給經濟の行はれる状態の下に於ては、價格のことは殆んど問題になり得ないで、たゞ生産品の質と量とが大事故だけれども、現時の如く農業も亦營利企業として經營せられるものに在つては、生産物はたゞに其の質や量はかりでなく、商品としての其の價格が經營上最も重大な關係を有することとなり、量や質やは之を價格と照し合せたる上で甫めて經營上に意義を有し得る。そして其の價格の關係に於ては、生産者としての農家の利益だけから之を謂へば、固よりそれが彌が上にも高價で、生産費との照合採算上多大の企業利潤を生み出すに足る程度の價格たるを以て、最も有利とするわけだけれども、然し農家とても生活の必需品たる食料品の生産を主とする限り、一般消費者の利害

を無視するわけには行かぬから、農産物の價格は、つまり生産費を回収してその以上に正常的な利潤を生み得る程度に於ける正常的價格たるを以て満足する外なく、其の程度に於て價格の安定せんことが、農家としては實際上望ましき所で、又その程度の價格ならば、農家が正當に社會に向つて之を要請し得る所なりとする。そこで農民は此の程度に於ける農産物價格特に米價をば維持せん爲めには、其の維持運動の必要なる限り之を爲すに何等の差聞なく、又之を爲すことは、價格が其の程度以下に下落する場合には、洵に必要止むを得ざる所とせなければならぬ。

然るに又之を致ふれば、正當なる米價の維持といふことは、政府の之を行ふ米價調節策なるものに依つても行はれ得べきやうだけれども、從來我國に試みられたやうな遣方では、それが十分な效果を奏せんことは、所詮望み得られない。たゞ暴利取締に依て或種の米穀商人を壓迫したり、賣惜み買煽りを取締つたり、又僅かばかり米穀を政府に買上げたりする位のことでは、到底米價調節の奏功し得べきものではない。之に比すればまだ彼の農業者の不賣同盟の方が效果あり得べきで、農民側の一致團結が相當に堅固に出來さへすれば、其の運動は相當の効果を擧げ得べき見込がある。

又彼の米穀法なるものに就いて見るも、その運用は政府者の主張では、たゞ米穀供給上の調節を圖る爲めに行はれるのみで、價格の調節を目的とせないといふのだが、價格が市場に於ける商

品の需要供給の關係に依て定まるものたる以上、供給の調節が十分有效に行はれるに於ては、それは自らに價格調節の働を示すことゝならざるを得ざるべきは明かである。然るに今現に之を見るが如き米穀法の運用の實狀を以てしては、供給の調節も價格の調節も、共に殆んど多く見るに足るほどのものなかるべきは、如何に最貝目に見るも之を認めざる譯に參らぬ。農民としては所詮かゝる二階から眼藥式の政策なるものにのみ之れ依頼して居るわけに行かぬ。よし其の政策が多少の効果を奏し得るにしても、たゞ之に依頼して他方安神で居た日には、農家の經濟と運命とは、現に之を見るが如く、年と共に逼塞する外はない。

されば現今農民たるものは、どうしても起つて自ら求め自ら運命を開拓する外なきことになる次第で、米價維持運動の如きも、不賣同盟なり其他の方法なりを以てして、思切つて行はれる外はない。

然し私の觀る所を以てすれば、米價維持——否寧ろ米價の正當構成を恒久的な狀態として造り出さん爲めには、結局は米穀の國家專賣制を實施する外に、他に方策はあり得ないから、農民の運動も此の根本政策の樹立の要求に向つて進み行かねばならぬ。それと同時に又、專賣制をしてよく實現するを得よく有効に働くを得せしむべき其の素地を準備することの爲めに、運動は行はれなくてはならぬ。

米穀專賣制は謂ふ迄もなく國家の獨占賣買である。即ち米穀專賣法を制定して、米穀に關する私人間の賣買取引を一切禁止し、其の賣買配給は總べて國家の機關に依て行はしむることとし、やゝ現存の壟專賣制に似たる制度を造り上ぐることを意味する。現時のやうに、米穀は之を生産者側からいへば、其の生産者は全國民中の約半数にも及び、其の生産量は全國內生産物中之に比肩するものなき最大のものであり、兎に角國內の最大産業を形造るものたり、又之を消費者側からいへば、國民日常生活の必需品で、一日も之を缺ぎ能はざるもので、要するに生産者と消費者と合せて最も廣汎に又最も深刻に國民利害の係はる所のものたるに拘らず、その價格の構成は、たゞ之を市場に於ける自然の成行に放任し、商人の投機賣買にすら之を委して顧みざるが如きは、どう考へて見ても吞氣千萬の沙汰と謂はねばならぬ。其の價格構成に對しては、生産者の利益と消費者の利益とを共に顧慮する所の、社會全體の意思を代表する所の國家の意思が、勦を及ぼし得るものとする必要がある。その爲めにはどうしても結局專賣制を實施する外はなく、之を實施するに依て甫めて徹底的に、公益の爲めにする價格の支配が行はれ得る。

そして米穀專賣制を行ふに就いては、農生産者から國家が米穀を買上ぐるに際しては、其の買上價格は生産費を基礎とし、地方々々生産費の精確なる實地調査を行つて、地方々々に於ける標準買上價格を定めて行く外はない。そして其の買上價格が生産費を償つて尙ほその以上に農民が

生産を續け其の經濟を行ひ待る程度に利潤所得を剩すものであるならば、甬めて茲に農民は農業經營上に於ける安定を得、從て又其の生活も安定されて、現今米價其他一般的に農産物の價格の頻繁にして又激甚なる變動の爲めに苦感せしめられつゝある農家經濟の不安定は除去され、農民は樂むで其業を行ひ又其の生活に安住し得る物的基礎を確めらるゝこととなる。然かも此事元來農民なる者の性狀と田舎の生活とは、最も適當せるものたるを思はなくはならぬ。

然るに世には、米穀專賣制結構だけれども、之を行ふには莫大の經費を要し、到底貧弱なる我國の財政のよく之を料理し得るものでないを考ふる人達が在る。けれども之は其の方法宜しきを得れば、人々の思ふほど爾かく莫大の經費のかゝる事業ではない。若し國家が一時に現今我が國內市場に動くほどの米穀を買入れ、現金で以て其の代價を支拂はねばならぬのならば、成程莫大な金が入るであらう。假りに四千萬石動くものとして石參拾圓と假定するも拾貳億圓を要する。そんな金は國庫を倒さに振つたからとて出さうにない。けれども專賣制の下に於ては買ふ必要あると同時に賣る必要がある。金の要るのはたゞ其の賣買の出會を繋ぐだけの資金たるに過ぎぬ。それだけの金ならばそんな莫大なものではない。

それに又買上米穀の代價は一々之を現金で支拂ふ必要はなく、國庫の發行する米券を以てしてはいわけだから、米券制を採り、たゞに代價の支拂に供するばかりでなく、それは國庫に對する租

税其他の公納金に用ゐるを得るものと爲すに於ては、田舎に於ては案外便利で、貨幣の補助として用ゐらるゝに至るであらう。そして之を現金に両替する必要ある者に對しては、郵便局にても、特約ある銀行にても、其の事務を取扱ふことにして置けば、社會に何等の不便なく、同時に國庫の負擔も比較的輕くて、米穀專賣制は圓滑に運轉するを得べき筈である。

尙ほ米穀專賣制そのものに就いては、多くの論すべきものがあるが、茲にはたゞ現時の農業經濟救済の道として、米價安定の手段として、其の頗る有效なるべきことゝ、又その實行の決して不可能にあらざることゝを論示するに止めて置く。詳しくは又別にそれだけを論議する機會あるであらう。

## 九 公課輕減運動

次に農民運動の行はるべき當今の要務は、農業上に於ける生産費低減の爲めにする所のものとや農家經濟の負擔の輕減の爲めにする所のものでなくてはならぬ。そして此の運動も亦種々の方面に關して行はれ得るが、當今現に問題となつて居る所の減税運動の如きも、此の意味に於て之を解する外はなく、又此の意味のものたる限り、一概に其の不當なるを謂ふことが出來ぬ。租税の輕減を要求する運動はたゞそれだけを皮相に觀察すれば、如何にも得手勝手な運動のやうに見へ

るけれども、現今農家經濟の實狀と租税其他の公課の負擔とを兩々比較して見るならば、如何に其の公課負擔の重き爲めに、農家の經濟の窮迫しつゝあるかを知るは、決して困難のことでない。今若し公課負擔の輕減が相當に意味ある程度にまで行はれ得たならば、爲めに農家の經濟の助かる所は、蓋し些少であり得ない。

現今農村に於ける租税負擔は、國税負擔よりも地方税負擔の重きことは、廣く知られた事實であるが、其の地方税中に在つても教育費負擔最も多大なりとせられて居る。そして其の教育費負擔は他方又現今農家の子女も多く中等以上の教育を受けることとなり、其爲めに學費として父兄の支出せなければならぬ費用の多大なることと相待つて、最も多く中以上の農家を苦しめて居る。即ち自作農階級と中小地主階級とを苦しめて居る。此秋に當つて義務教育費の國庫補助の行はるゝ如きは、先づ喜ぶべきことと謂はねばならぬが、農民としては尙ほ其以上に、地租其他の減税運動や廢税運動やを起すに至るも、亦實に止むを得ざる所なりとする。

近頃商工業者の中に在つても、營業税の廢止の爲めに運動が行はれて居り、其の理由とする所は、營業税の賦課がとかく公正に行はれ難く、税として惡税たりとせらるゝ點に在る。然るに今農民の間に起りつゝある地租輕減運動の如きは、地租が悪税だとか良税だとか謂ふのではない。實に農民が其の負擔に堪え得ないと同時に、商工業者其他との比較に於ても、農民の税負擔が重



きに過ぎ、課税上の均衡が保たれて居らぬといふことが其の理由たらざるを得ない。以て如何に農民の間に於ける此運動が眞刻なるかを見るべきだ。

尙ほ租税輕減に關聯して考へらるべきことは、やれ赤十字社の寄附だとか、愛國婦人會の寄附だとか、在郷軍人會、青年會、何々會何々會の寄附だとかいふものゝ頗る多くて重きことである。然かもその或者に至つては郡長や町村長の如きがやゝ強制的に農家に之を割當てるやうな場合さへあり、農民が爲めに被る苦痛も、租税に劣らぬものがある。まだしも租税なれば國民の義務として止むを得ざる所もあるが、あまり賛成もしないやうな會の寄附の強制的徴收に至つては、其の苦痛更に一層大なるものがある。此等の半公的負擔の輕減を行ふことは、又實に現今の急務であつて、農民が之を求めなくても、其の輕減廢止は政府や地方廳の手心でも出来ることである。然しもしそれが行はれぬとならば、農民としては不納同盟を行ふも亦場合によつては止むを得ざることであらう。

次に又農民運動に就いて考へられることは、農民の政治運動である。若し議會政治を否認し、所謂直接行動主義に據るならばいざ知らず、苟も議會政治を認め、其の下に在つて立憲治下の國民たるを以て居る限りは、農民も亦或は參政權の普遍化の要求の爲めに、或は又農業と農民利益との代表の爲めに、農民黨組織の運動を起したり、衆議院議員府縣會議議員等の選舉に際して運動

を起したりすることは、實に止むを得ざる所に屬する。商工業者といふが如き、一團體としては成立ち難く、成立つても頗る異質性ヘテロゼニアスのもので、團體内部の利害の容易に一致し難きもの、間に於てすら、商工黨など、稱せらるべき團體が組織せられ、政治運動が其の機關を通じて行はれんとする我國の現状なのだから、農民の如く其の産業が單純一様で、其の利害一致し易く、同質性ホモゼニアスの團體たり得る素地の多い者の間に、政治的團體が生れて、農民黨と名け得らるべきものゝ組織されたりとて、何の不思議もない。

そして若し農民黨が眞實堅固に組織されたならば、其の政治上に於ける實力は随分強大なものであり得べきこと、想像に難からざる所で、普露西の實例に徴するも思半ばに過ぐるものがある。

併し少しく大きな眼で之を見れば、同じ國內に商人黨だとか工業黨だとか農民黨だかいふものが、各々分れて一城一角を衛り、互に鬭争軋轢する如きは、決して喜ぶべき現象とは謂へぬ。けれども今の政治組織が、各人利害の一致する所に於て集り、集つて黨派を造り、各々利益を代表し主張して、其の妥協を主調として政治の行はれることになつて居る以上、農民たるもの、たゞ獨り分散離在して、農業共同の利益を擁護しないで置く譯には行かぬ。所謂議會政治なるものが斯かる意味合の下に行はるゝものたる限り、農民も亦その議會政治に於て有力なる發言權を持ち得べきやう、其の黨同伐異の仲間入りをすることは、洵に止むを得ざる所であらう。大きく謂へ

は議會政治は最早時代後れであるかも知れぬが、我國の現狀に於ては、其の議會政治を切抜ける爲めにも、先づ以て議會政治上に於ける又は議會政治に對する一大威力を造り上げる必要がある。そして商工業者も労働者も銘々が其の威力を造り成さんとする際、農民亦其の事業に参加して惡いわけはない。要するに政治に新生面を開く爲めにも、農民運動の行はれんことは、我國現時の狀況の下に於ては、蓋し必要なことであらう。

## 十 農業の工業化と共同企業化

上に示す所は、農業が産業として一般的に立行き難き境遇に在るが故に、其の救済の爲めに行はるべき運動や方策に就いての議論であるが、尙ほ農業全體の運命を救ふべき道としては、田舎に於ける労働の季節的繁閑を調節し、一年中を通じて其の平均的利用を得せしむる方策が、講せられなければならぬ。此の方策としては、從來普通に副業の奨励といふことが行はれて來たのだが、其の副業の意味と實際の業務とに至つては、固より區々たらざるを得ない。そして從來の副業と稱せらるゝは、主として農家の業務組織上より之を見て、其の事務の本體たるものを本業と考へ、之に附隨して行はるべきものは皆之を副業といふ概括的な名稱の下に入れるのが例であつた。従て其の副業なるものの中には、其の業務それ自身の性質よりいへば、農業の部類に屬する

ものもあれば、加工工業に屬するものもあつた。

所が今農業全體の行詰れる運命を復活せしめん爲めに行はるべき副業に至つては、どうしても主として工業的性質のものでなくてはならぬ。その意味に於ては此事は田舎の小工業の復活といふこと、同様の意味合のものとならざるを得ない。即ち田舎に於て嘗て存在したやうな小工業を復活せしむると同時に、又新たに田舎に適するやうな小工業を扶植するに於ては、一面に於ては、農家は其の勞働力をば農業と小工業とに然るべく按排して利用するを得、以て一年を通じて平均せる勞働力の利用を爲し得ることとなると共に、又一面には、田舎の産業がたゞ農業といふ單一なるものでなくなり、農工混在のものとなつて、田舎の經濟一般が彈力に富めるものとなり、現時の行詰れる運命は之に依て勵からずくつろげらるることゝなべきである。

昔時は田舎にはかなり澤山の小工業が存在して居た。然るに近世大工業の發達は、漸次に其の田舎の小工業を奪つて之を都會の工業となしてしまつた。その結果現今となつては、田舎には殆んど工業の見るべきもなく、たゞ農業といふ單一の産業が其の性質上都會には持て行けぬものだから、依然として田舎に残し置かれてあるばかりで、田舎の産業狀態は頗る單純なるものとなつてしまつた。此事は一國産業の勃興とか隆盛とかいふ眼から見れば、洵に都合のよいことたるに相違ないが、田舎の經濟は之が爲めに頗る立行き難きものとなつたのである。田舎の人々は農

業といふ本來利廻の薄い仕事に従事して居乍ら、然かも一年中の半分か精々三分二位しか働かないで、あとは働かんにも仕事のない有様なのだから、其の經濟の困難なる、謂はゞ當然のこと、も見なければならぬ。

されば今後の方策としては、田舎の小工業を復活せしむるは、農村救済の目的の爲めには、甚だ意義ある所たるを疑ひ難く、そはたゞ獨り經濟的に有意義のことたるばかりではなく、農工一身共同の状態の造り出されんことは、農村生活一般に取つて頗る喜ぶべきこととせなければならぬ。

併し現時の如き時勢の下に於ては、たゞ小工業だけを田舎に復活せしめたからとて、それで田舎の工業化とは謂ひ難く、然かも田舎の救済の爲めに結局必要なのは田舎の工業化といふことであらねばならぬ。然らばその工業化とは謂へば、それはどうしても大工業を田舎に分布するといふことになるのだが、其事は色々の意味に於て甚だ必要で大に喜ぶべき所と見得られる。現時は商工業すべて營利本位に行はれるものだから、商業が都會に集合して行はれるは勿論のこと、工業も亦製品販賣の必要と便利との爲めに、やはり都會に集合して行はれ、その結果前に述べるやうに、田舎の工業はすべて都會に奪はれ、田舎にはたゞ農業だけが取殘されることになつたのだ。されば今若し工業が田舎に分布せられる勢の造り爲されるに於ては、實に田舎が之に依つて潤ふ

ばかりではなく、其事は同時に現時の餘り極端なる營利主義を打破するが爲めにも役立つこと、なる。

兎も角大工業が田舎に分散さるゝに至れば、田舎の人々は農業と併せて工業の爲めに勞働するを得ることとなり、又田舎の産業が農業と限られざることとなる結果として種々の利便を、經濟的に享受するを得るに至る。そして又工業の方に在つても、勞働者の保健上其他に於て、其が田舎に於て行はれることに伴ふ多くの利便を獲得し得べきは明かで、現今の實狀はたゞ資本と人と交通の便と利得の機會とが、總べて都會に集められて居るものだから、工業亦都會又はその附近に於て行はれる外なきを見る次第なれば、其の狀況が一般的に變化せしめらるゝに連れて、工業が都會に存し行はねばならぬ必要と便宜とも漸次に少きものとなるべきは疑なき所なりとす。さすれば工業の田舎分布てふことは、農村の爲めにも又工業そのものゝ爲めにも、共に都合よきことで、同時に最も喜ぶべきは、生産經濟に於ける都鄙の區別が之に依つて少くせられ、都鄙間に於ける機會均等の之に依て少からず實現せらるゝこと之である。

次に又農業振興の爲めに必要なことは、現時の農業上に於ける極端なる個人主義を緩和し、出來得べくんば之を打破して、今少しく農業にも共同企業之行はるゝものたらしむべく、其の方策を講ずること之である。

昔時は農業にはかなり廣く共同作業の行はれたものである。大古には土地も氏族團體や村落團體やの共有で農作も共同に行はれたこと經濟史の之を實證する通りだが、土地が家族團體の個別的私有に移つてから以後も、農作は依然として共同作業の俤を止め、其の遺習の一小部分は現時に残存するほどである。けれども土地の所有と農事の經營とが個別化してからかなり長き時代が経過し、特に近代に於ては個人主義が一般的に經濟方面にも浸漸した爲めに、現今の農業は頗る個別化してしまつた。そしてそれが餘りに個別化し特に我國の如きに在つては農村人口の未だ頗る多い爲めに、農家一家の農事經營は頗る小規模のものとなつて、然かも集約經營の益々十分に行はれるに連れて、經營規模は益々小さくなり、其の狀勢に於ては、工業經營が漸次大規模のものとなりつゝあると反對の傾向を示しつゝある。此事獨り我國に於て然るのみならず、歐洲諸國に於ても然るものあること、夙にベルンシュタインの之を論證した通りである。

併し現時の營利企業に於て、小規模經營に對する大規模經營の優越は、年と共に益々著明ならんとする有様だから、右の實狀ある爲めに、農業の被りつゝある企業競争上の不便と不利益とは些少なからざるものがある。之が爲めに商工業に比して農業は營利企業として常に大いにひけを取らつゝある狀勢の促進せらるゝ所も決して少くない。

されば今農業をその産業全般の運命に於て救済し、その繁榮を圖らん爲めには、農業を特に我國の農業を、今少しく大規模のものと爲すことは、其の必要缺くべからざるものがある。然るに

農業經營を大規模のものとなさん爲めには、之を會社組織のものと爲すの困難は絮説を待たざる所で、それはたゞ或種の農産製造業に於てのみよく實現され得べきに過ぎざれば、其の大規模化は所詮組合組織の普及に依て行はれる外はない。

即ち組合組織を廣く農業に普及して、たゞに農産物の販賣や、農産製造や、肥料農具等の購入やに於てのみならず、農耕の作業そのものをも、廣く共同作業として組合の經營の下に行ふこともならば、之に依て農業は現時の小農制より進むで、大農制に入り、その間より生ずる利便の多大なるべきことは、特に我國の如き小農制の極端にまで過小農制化したる所に於て、多大なりとせなければならぬ。大農制となれば信用に依る資本利用の道も大いに開け、機械を購入して之を使用する經濟上の便宜と技術上の可能も造り出され、機械を用ひて大規模經營が行はるれば其の作業上には分業の利便も得らるゝこととなり、這間に生ずる經營上の利益は、決して小なりとすべからざるものがある。

そして又農業に廣く組合的共同企業が行はれることになれば、それは決して壻獨り經營上の利便を生ずるばかりに止らない。之に依て共同自治の精神の涵養せられる所多大なりとせなければならぬ。固より組合的共同企業は、先づ農氏の間に共同自治の精神が備はらなければよく成功し得べきものでないけれども、同時に又組合作業に依る實地訓練の行はれるに依つて、その共同自治の精神の大いに涵養せられる所あるを忘れてはならぬ。事情は循環的に動くものなのだから、實



地の問題としては、努めて農民の間に共同自治の精神を鼓吹し、あらゆる機會と方法とに於て之が訓練を爲すと同時に、實際作業の上には又努めて組合企業の獎勵普及を圖り、以て益々健實に、協同自治の大精神を陶冶體得せしむることにすべきである。ともかく共同自治の精神と之に依る共同生存の實の擧げらるゝに依てのみ、よく農業と農村とは、其の生命を保持し又よく其の業務の發展を期し得べきものたること、疑ふべからざる所に屬する。農村生活に如何に共同自治の精神の必要で又貴重なるかは、前に論じた農民自助運動の必要でふことに照し考ふるも明かだ。

要するに、一面には田舎の小工業を復活せしめ、又大工業の田舎分布を行ふと同時に、他面には又農業そのものを共同企業化して、之を大規模經營と爲し、又其の生産技術を機械化し、又その生産物の販賣、生産原料の購入等を共同的のものたらしむることに依て、積極的に現時の經濟と農業との適合を多少ともに實現するを得るに於ては、之に依て農業が業務として立行き得べきものとなり、ともかくもあまり時勢に後れないで、世間並みに進み行くを得るものとなるべきを思ふことが出来る。若し之に依ても尙は農業は、業務として漸次衰微に傾き、懸て滅亡の勢にも脅さるゝを避け得べからざるものなりとせば、現時の經濟生活一般に涉る根本的革新の行はれざる限り、農業は終に助からぬものとあきらめる外はない。

總べて上に論ずる所は、農業々務全般の運命に關する問題に就いて、就中重要なる諸點を示したるものである。而して現今我國に於ける農村問題は、實に此の産業としての農業々務の運命の

年に傾き行かんとする狀勢を以て中心とすること、前にも一言した通りなれば、此の問題の解決と時情の救済との行はれざる限り、農業々務内部に於ける問題例へば小作問題の如きが、それ自身として十分に解決せられても、我國の農村問題は、依然として困難で然かも憂ふべき問題として遺ることを、呉々も注意せなければならぬ。小作問題は、其の階級戰爭的な意義に於ては、洵に重大な問題だけれども、又之に依て農業々務が傷けられ、農村生活の破壊さるゝ點に於ては、最も恐るべき問題で、従てそは、農業全般の運命に關する問題並びに農村生活一般に關する問題と密接に連結された問題だけれども、現今農村問題の重點は其所には存せない。小作問題が解決せられないで益々進展して行詰れば、農業と農村とは、終に破滅に陥るを免れ得ないだらうけれども、そがよく解決せられても、農業々務全體が今少し企業として引合ふものとならざる限り、そして一方現時の營利主義經濟が一般狀態として繼續する限り、農業はやはり衰亡に陥る外はない。農業衰亡すれば、農村生活の自らに寂滅すべきは言を俟たぬ。

されば農業といふ産業全體の漸次行詰らんとする運命を救済し、之をしてよく存立するを得せしむべき道を講ずることは、實に現今我國に於ける農村問題を解決すべき樞要點たるを知らねばならぬ。けれども尙ほ農村問題には殘されたる重要方面がある。そして文化一般の問題としては恐らくはそが最も重要な方面であらう。私は進むでそれについて論ぜなければならぬが、餘り長くなるから、次號に譲ることとする。